南サハリンの新生界と *Fortipecten takahashii* の産出状況

中島 礼*・天野和孝**・Vladimir D. Khudik***

Rei Nakashima*, Kazutaka Amano**
and Vladimir D. Khudik*** :
Cenozoic formations in South Sakhalin
and the occurrence of
Fortipecten takahashii

* 科学技術振興事業団 科学技術特別研究員：産業技術総合研究所 地球科学情報研究部門地質標本研究グループ。Japan Science and Technology Corporation, Domestic Research Fellow : Geological Survey of Japan/AIST, 1-1-1 Higashi, Tsukuba, Ibaraki 305-8567, Japan

** 上越教育大学自然系。Department of Geoscience, Joetsu University of Education, 1 Yamayashiki, Joetsu, Niigata 943-8512, Japan

*** ロシア科学アカデミー地質学研究所極東支部。Far Eastern Geological Institute, Far Eastern Branch, Russian Academy of Science, Vladivostok 690022, Russia

2001年10月9日受付。2001年12月21日受理。

第2図. Makarov地域のLesnaya川に露出する上部新生界。川の右手前がAusi層（細粒砂岩層、コンクリーションを挟むシルト岩層）、川の左奥の崖の下半部がKurasi層（コンクリーションを含むシルト岩層）、上半部がMaruyama層下部（砂岩およびシルト岩層）に相当する。

第1図. 南サハリンにおける新生界の分布。Sasa and Koiwai (1960)を簡略化して加筆。赤丸が調査地点。1：Maruyama層，2：Kurasi層，3：Ausi層，4：下部中新統～漸新統，5：第四系，6：中部中新統。

ロシアのサハリン島には新生界が広く分布し、サハリンと日本の地質の対比は北西太平洋における古環境変遷や北方系生物の系統解析などに重要な意味を持つ。しかし、サハリンへのアクセスの問題や両国の研究者の分類学的見解の食い違いなどから、両地域の対比は十分とはいえない。ペレストロイカ以降地質調査でサハリン行きが可能となり、今後の活発な研究交流が期待される。

調査はMakarov地域に分布する中部中新統Ausi層，Kurasi層，下部鮮新統Maruyama層中部とTaranay地域の下部鮮新統Maruyama層中部で行った。各層から貝類化石が多産し、特にMakarov地域のMaruyama層中部は本邦新生代の代表化石である*Fortipecten takahashii* (Yokoyama)の模式地として知られる。ロシアではこの種を前期鮮新世の示準化石として扱っているが、この種は中新世末から前期更新世まで生息していた可能性が高く、Maruyama層の地質年代の再検討が必要である。

文 献

Sasa, Y and Koiwai, T., 1960, *Geological map of the Sakhalin Island*, 1 : 250,000. 10 sheets with geological data, GHQ Publication.

第3図. *Fortipecten takahashii*の模式地（磯牛）周辺のGari川にかかる鉄橋（左）。線路左側はオホーツク海で、砂浜には*F. takahashii*と現世の貝殻が混在する。線路右側は模式地のMaruyama層中部の崖。細～中粒砂岩（右上方向が上位）中に*F. takahashii*の密集層が何層もみられ、貝殻は層理面に対してconvex-upの配列を示す（右）。

第4図. 模式地から採集された*Fortipecten takahashii*（トボタイプ）。右側2列の膨らんだ個体が右殻で、左側2列の平らな個体が左殻。ハンマーの柄は約30 cm。右殻の膨らみの変異は大きい。

第5図. Taranay地域のBachinskaya川における*F. takahashii*の産状（左）。*F. takahashii*は細粒砂岩中の密集層に含まれるが貝殻配列に明瞭な傾向はみられない。ボードの長辺は20 cm。この川沿いには至る所にヒグマの足跡がみられ（右）、銃を携帯していなければ安心して調査ができない。